

## モロッコの「政治的安定」とイスラーム急進派の活動

私市正年（上智大学）

はじめに——モロッコの「政治的安定」の背景

### （1）「アラブの春」と国王主導の改革

モロッコは、いわゆる「アラブの春」の政変の影響が国内に及ぶようになるといち早く、国王の指導下に新憲法案を作成し、2011年7月1日、国民投票にかけてこれを承認した。新憲法ではいくつか注目すべき規定もみられる。たとえば、「モロッコ王国の統一性はその構成要素の全てが一体となった統一性である。すなわち、それらは、アラブ・イスラーム的、アマジグ的、ハッサーニーヤ・サハラの構成要素が一体となり、さらにそれらに加えて、アフリカの、アンダルシア的、ユダヤ的（'ibriyya）、地中海的支要素によって豊かにされている」（2011年憲法前文）は、多様なモロッコ人アイデンティティーの中に、ユダヤ性を認めている。アラブ諸国の憲法でユダヤ性を、国民のアイデンティティーとしたのはモロッコ憲法が初めてであろう。また、「アラビア語は国家の公式の言語である。国家はアラビア語の保護と発展、およびその利用促進のために努める。またアマジグ語（ベルベル語）も例外なくすべてのモロッコ人の共通の財産として国家の公式の言語としてみなされる」（5条）とあるように、ベルベル民族の地位をこれまでよりも高い地位にしていることもアラブの春」への対応の変化の1つといえる。

では政治的規定はどうであろうか。「国王は、衆議院の選挙で第一党になった政党の中から首相を任命する。国王は、首相の提案に基づき、閣僚を任命する」（47条）とある。旧憲法の規程では、「国王が首相を任命する。国王は、首相の提案に基づき、内閣の他の国务大臣を任命する」（24条）とあることから、新憲法では国王の権力が縮小され、民主化が進んだとも言われる。しかし、「国王の人格（shakhs）、その神聖さ（hurma）は侵されない（tuntahak）。国王に対し、尊敬（tawqiyir）と敬意（ihtiram）が払われなければならない」（46条）とあり、旧憲法の規程「国王の人格（shakhs）は神聖にして（muqaddas）、その神聖さ（hurma）は不可侵である（tuntahak）」（23条）と実質的には全く変わっていない。新憲法においても、国王は神聖不可侵の存在なのである。さらに「国王は国民および議会に対して、演説を行うことができる。両院議会で行われる国王の演説は、その内容についていかなる議論もしてはならない」（52条）は、旧憲法の28条と全く同じである。さらに国王の演説は勅令（ザヒール）と同じ意味をもち、超法規的性格を有している。このように新憲法案の政治的規

定はほとんど変わらず、民主化はみせかけでしかない、といえる。

## (2) イスラーム政党の取り込み

新憲法の承認を得て、国民議会選挙が前倒しする形で 2011 年 11 月、実施された。ここで一番、注目されるのは「イスラーム政党」といわれる公正開発党 (Parti de la justice et du développement: PJD) が第一党の地位を得たことである。

表 1 2011 年 11 月 25 日衆議院選挙 (総議席 395)

*公正開発党 (PJD, イスラーム系)	107
*イスティクラール党 (Parti de l'Istiqlal:PI)	60
独立国民連合 (Rassemblement National des Indépendants: RNI)	52
真正近代党 (Parti Authenticité et Modernité: PAM)	47
人民社会主義諸勢力同盟 (Union Socialiste des Forces Populaires, USSP)	39
*人民運動 (Mouvement pPopulaire: MP, ベルベル系)	32
立憲同盟 (Union Constitutionnelle: UC, リベラル派)	23
*進歩社会主義党 (Parti du Progrès et du Socialisme, PPS)	18

(注) \*は連立与党。(出所) 筆者作成。

この選挙結果はモロッコ史上はじめて、イスラーム系政党が第一党となったことで注目された<sup>1</sup>。首相は PJD 党首のベンキーラーンが就任し、31 の閣僚ポストのうち、首相、外相、法務相、通信相など 12 ポストを PJD が占めたが、国防大臣や内務大臣は無所属議員が就任したことに、王権と PJD との協調的姿勢がみてとれる。なお、2013 年 7 月に PI が連立から離脱し、代わりに RNI が連立に参加、現在は、PJD、RNI、MP、PPS で連立が組まれている。さらに、2013 年 10 月 10 日、第 2 次ベンキーラーン内閣が発足したが、建設省大臣、スポーツ省大臣など 5 ポストのみの小規模な内閣改造にとどまった。

### (3) 経済発展

表2 1人あたりの国民所得 (単位は米ドル)

年	1990	1991	1992	1993	1994	1996	1997	1998
所得額	1,199.49	1,264.66	1,281.76	1,183.32	1,314.76	1,541.42	1,364.46	1,440.93
年	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2006	2007
所得額	1,407.11	1,300.58	1,308.39	1,384.88	1,687.73	1,908.44	2,151.72	2,439.07
年	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	
所得額	2,850.80	2,884.66	2,849.85	3,082.34	2,948.88	3,160.27	3,392.27	

(注) 数値はIMFによる2014年10月時点の推計。

モロッコの政治的安定は、21世紀に入ってからモロッコ経済の急速な発展が大きく寄与していることは間違いない。モロッコは、石油や天然ガスといった天然資源に恵まれない国なのに、国民1人当たりの所得は、西暦2001年の年1,308ドルから、2011年には3,082ドルにまで増加した。10年間で2.36倍も増えているのである。その背景に経済的規制緩和があると考えられる。1999年にタンジェに、経済自由特区(タンジェ・フリーゾーン、Tanger Free Zone: TFZ)を創設し、外国資本の積極的導入をはかった。具体的には輸入関税免除、関税手続きの簡素化、法人税の5年間免除及びその後20年間8.75%に減税、個人所得税5年間免除及びその後20年間80%控除、土地収用に関する登記税免税、職業税(Tax professionnelle)の15年間免除といった措置がとられた。その結果、多くの外国企業が進出した。日本の企業も、日産・ルノー・タンジェ工場(TFZ内にあり、主に欧州向けに自動車の組み立て)、SE Bordnetze Morocco(SEBN-MA:住友電工グループ会社)の自動車用ワイヤーハーネス製造(約4,000名の従業員を雇い、製造したワイヤーハーネスはタンジェ地中海港から欧州に向けて輸出)、三菱ふそうトラック組立工場(カサブランカ近郊のアイン・スバア近郊で操業)、矢崎総業(TFZ内)などが進出し、雇用の創出に貢献した。

#### 1. 政治的イスラーム領域は安定しているのか

##### (1) 「体制内イスラーム」の亀裂と劣化

モロッコ王制はイスラームを体制内化することによって、過激な暴力的イスラーム勢力の台頭を防止してきたといわれる。しかし、体制イデオロギーを創出するための？イスラーム教育は決して十分ではなかった。マドラサの流れを引き継ぐ伝統教育学校(des écoles formelles d'enseignement originel、小・中学校に相当)の生徒は、1970年に17,900人、1990年が17,400人、1998-99年が15,293人と漸減傾向にある。

王制が独立後にとったイスラーム教育政策の 1 つの柱は、モロッコのイスラーム学の最高権威機関カラウィーイーン大学の権威解体である。しかし多くのウラマーや「モロッコ・ウラマー連盟」などが反対したため、カラウィーイーン大学にはシャリーア学部が置かれ、フェスにシャリーア学部、マラケシュにアラビア語学部、ティトゥアンに神学部が新たに設置され、後にアガディール大学にシャリーア学部が創設された。しかし、伝統のあるカラウィーイーン大学には学部しか置かれず、卒業生はウラマーとは認められなかった。その政策は 1964 年のダール・アル＝ハディース (Dar al-Hadith) 学院の創設へと継承された<sup>2</sup>。

カラウィーイーン大学は 1970 年代初めに学生数が 1,000 人以下に減少していたが、その後 1980 年代初めには 5,000 人、90 年代初めには 7,000 人と増えた。しかし、学生は地方の農村の下層出身者が増え、フェスなどの都市出身者は減少した結果、教育レベルの低下が著しく、教材や教育法も古いままであった。さらに、国内のカラウィーイーン大学出身の教授は年々減り、ダール・アル＝ハディース出身者の割合が増した。

ダール・アル＝ハディース学院にはイスラーム学の修士・博士の過程が設置され、卒業生はウラマーとして認められた。彼らは体制を支える公式イスラームの代表者となり、大学のシャリーア学部や宗教学部の教授に、また政府関係の司法職に採用された。

## (2) 新しい「聖職者」の出現

カラウィーイーン大学の権威は解体され、それに代わって創設されたダール・アル＝ハディースの学生の出身層も基本的にはカラウィーイーンと違わなかったため、公式イスラームの学識全体が衰退していった。このことは、イスラーム高等教育機関が体制を支えるイデオログを生み出せなくなったことを意味する。つまり、公式イスラームからは、急進的で暴力的なイデオロギーに対応できる（抑制できる）高度な卒業生は育たなかった。

他方で、非公式のイスラーム教育を受け、高度なイスラーム知識を有する「自由ウラマー」が PJD 幹部や「公正と慈善の集団」の指導者となった。体制にとって急進的で暴力的なイデオログに対抗するために、高度な知識をもつ「自由ウラマー」の権威と影響力に頼る必要があった。こうして PJD の合法化への道（取り込み）が準備されることになる。

## (3) 二つのイスラーム政党

モロッコのイスラーム政党でもっとも動員力のあるものは、アブドゥッサラーム・ヤースィーンによって 1987 年に組織された「公正と慈善の集団 (Adl wa Ihsan)」である。しかし、この政党は、王政を正統なるものとして認めないため、今日に至るまで非合法である。

これに対し、1997 年に結成された PJD は王政を認め、合法的地位を得たことにより、王

政を支える公式イスラームの支柱となり、ついに 2011 年に第 1 党の地位を得た。

### 3. 急進的イスラームの台頭

#### (1) 「9・11」テロ事件とファトワー発布<sup>3</sup>

国王と政府が 2001 年 9 月 16 日に「犠牲者追悼の諸宗教集会」を開催した。会場はラバトの聖ピエール (Saint-Pierre) カテドラルであった。集会には、首相、ワクフ・宗務省大臣、ウラマー高等評議会議長、ユダヤ教ラビ、カサブランカのプロテスタント教会牧師、労働組合代表、PJD 党首などが出席した。国王は出席しなかったが、国王顧問のアッバース・ジラーリーが出席し、テロリズムを非難する勅書を読み上げた。

ところがその翌々日の 9 月 18 日、16 人の「モロッコのウラマー」の名で「犠牲者追悼の諸宗教集会」を否定するファトワーが出された。政府はすぐに 16 人を呼び出し、彼らが「公式の」ウラマーではなく、彼らのファトワーは無効であると述べるとともに、彼らに意見の撤回を要求した。その後 (10 月 31 日)、国王もフランスのメディアのインタビューに答え、ファトワーを出せるのは「ウラマー高等評議会」のメンバーに限られ、メンバー外の 16 人にはその資格がない、と述べている。しかし、撤回に応じたのは 12 人で、4 人は撤回を拒否した。

#### (2) 「公式イスラーム」非難

16 人のファトワー署名者の内、公認ウラマーは 2 人だけで、残りの 14 人は、モスクや自宅で個人的にイスラームを教える「自由ウラマー」であった。ファトワーの内容は、コーラン、ハディース、モロッコのファトワー集からの引用が大部分であるが、その参照方法は歴史的な脈を全く考慮せずになされる。例えば、下記のようにファトワーは「犠牲者追悼の諸宗教集会」での宣言を全面的に否定している。

キリスト教会やユダヤ教会でムスリムが祈ることは、すべてのムスリムに禁じられており、それを行うことはもっとも重い罪をおかすこと、モロッコのもっとも重要な聖なる信仰に対する侮辱である。・・・イスラームを信ずる者は、ユダヤ教徒ともキリスト教徒とも保護の関係を結ばない。コーランやスンナに述べられているように、ムスリムに敵対的な国と関係を結ぶことは大罪 (kabira) であるだけでなく、棄教 (ridda) であり背教 (kufr) である。したがってムスリムに敵対する不浄の国、アメリカと同盟関係をくむことは、モロッコには許されない行為である<sup>4</sup>。

要するに署名者たちは、ワクフ・宗務省の中に「制度化されているイスラーム」からの独立要求を主張したのである。すなわち「われわれは、ワクフ・宗務省による宗教的テキストの改竄を非難するし、それを認めることはできない。同様にアメリカでのテロ事件後の最初の金曜日、2001年9月14日のモスクでの説教内容について、ワクフ・宗務省が政治的説教を規制したことを、非難するし認めることはできない。これは、モスクにおけるイマームと説教師たちの自由を侵害することであり、また全能なる神とその預言者の言葉を変形することである。」<sup>5</sup>とワクフ・宗務省への非難が述べられている。

ファトワー発布はモロッコ宗教界に重要な変化が起こっていることを示している。それは新しい型の「聖職者」の出現である。16人の内、11人が私的説教師、そのうち3人がダール・アル＝ハディースの出身であり、ウラマー評議会メンバーは2人だけである。彼らが皆、自らはウラマーだと主張しているのである。

彼らはコーランやハディースについての深い知識があり、アラビア語のイスラーム文献に通暁しており、説教ではしばしばコーランやハディースに言及する。また敵と味方との区別をし、概して外国人嫌いで、敵に対してジハードを主張し、自らを新しいサラフィストと称している。

### (3) テロ事件

モロッコの公式イスラームが権威を失墜させ、内部から宗教権威の秩序が崩壊しつつある状況のなかで、当局も外的影響も受けた急進派の活動を阻止することができなかった。

#### (a) 2003年カサブランカ・テロ事件

2003年5月16日金曜日、夜10時頃、カサブランカ市内で同時自爆テロ事件が勃発した。死者の数は45人に達した。犯人は全員、カサブランカ郊外のスラム地区スィーディー・ムウミン (Sidi Moumine) 地区の出身者であった。

テロの現場は、ファラー・ホテル (Farah)、スペイン・文化センター (Casa d'España, 2回爆破)、ユダヤ教徒文化センター (Le Club de l'Alliance israélite)、

イタリア・レストランの4箇所、計5回の爆破が起こった。このテロ事件はモロッコだけでなく、国際的にも衝撃的であった。というのもモロッコのイスラームが他のアラブ・イスラーム諸国、特に隣国のアルジェリアとは異なり、穏健イスラームのイメージを持たれていたからである。テロの標的にされたのは、外国人と酒のサービスのある場所であり、またイラク戦争におけるアメリカの同盟国スペインとイスラエルに関わる建物であった。

**(b) 2004年マドリード列車爆破テロ事件**

2004年3月11日、スペインのマドリードで列車の同時爆破テロが起こり、死者191人、負傷者およそ1,400人という恐ろしい数の犠牲者を出した。翌日、容疑者として逮捕された15人の大部分はモロッコ人（スペイン国籍に変えた者も含む）であった。これら2つのテロ事件によって、モロッコがテロリズムから免れた安全なイスラームの国というイメージは完全に消えたといえよう。

**(c) 2011年マラケシュ広場でのテロ事件**

2011年4月28日、観光名所であるマラケシュのジャマア・アルフナ広場に面するカフェ「アルガナ」(ARGANA)で爆弾テロ事件が起こった。そのテロで、外国人観光客ら17人が死亡、23人が負傷した。当局は、同テロ事件の実行犯が「アル・カーイダ」を信奉していたと発表した。

**(4) ジハード・テロリズムの背景**

アフガニスタン解放に勝利したアラブ系ムジャーヒディーンは、祖国に帰った後も自らの存在と行動様式を正当化する必要があった。モロッコにおけるジハード・テロリズムの流れで重要な地位を占めたのはこのような人々で、「モロッコ・アフガン (Afghan maghribi)」と呼ばれる集団がよく知られている。彼らはソビエトに対するアフガニスタンのゲリラ闘争に義勇兵として参加し、90年代初めにモロッコに戻ってきた人々である。戦闘員の数は最初約40人くらいであったが、その後約400人にまで増加したといわれる。

同じ系統のグループでは「サラフィスト・ジハーディスト」や「タクフィール・ワ・ヒジュラ」とよばれる集団が存在する。後者は1998年以来6人の暗殺に関与したとされる。

こうしたジハード諸集団のメンバーが中心となって、1990年代末にモロッコ・イスラーム戦闘集団 (Groupe Islamique Combattant Marocain: GICM) が結成された。彼らはイスラーム・マグリブのアル・カーイダ (Al-Qaïda au Maghreb islamique: AQMI) とつながり、2002年アメリカ国務省はこの組織をテロリスト組織のリストに入れた。モロッコ当局は、2003年5月16日のカサブランカのテロ、続いて2004年3月11日のマドリードのテロは、アル・カーイダによって計画され、GICMによって実行されたと断定した。

**4. 「モロッコの政治的安定」の背後にあるイスラーム急進派の活動**

これまでの検討からモロッコの公式イスラームは劣化し、必ずしも安定した権威を維持していないことが明らかになった。それに呼応するように暴力的な急進派がテロ活動を行

うようになり、他方で体制は自由ウラマーの取り込みによって政治的安定を確保しようとしてきた。2011年のアラブ政変後、イスラーム政党 PJD が第 1 党の地位を認められ、王政と協調的關係を築いたのはこのような背景があったからである。それではこうした体制の政策は成功しているといえるのか。そこにはいくつかの矛盾や謎が存在していることがわかる。

- ①体制によるイスラームの取り込みと、取り込まれないイスラームの行方は？
- ②モロッコから多数の戦闘員がシリア・イラクに向かうのはなぜか？
- ③パリのテロ事件（2015年11月13日）およびベルギーのテロ事件（2016年3月22日）がモロッコ系ムスリムによって実行されたのはなぜか？

### （1）多数のモロッコ系ジハーディスト

国内の政治的安定とは裏腹に実はモロッコからも多数のジハーディストがシリアやイラクに出かけている。表 3 は、2014 年後半のデータであるが、それによればモロッコ人のジハーディストの数は、チュニジア、サウディアラビアに次いで 3 番目に多い。

表 3 シリア、イラクで戦う戦闘員の出身国別データ

チュニジア	1500-3000
サウディアラビア	1500-2500
モロッコ	1500
ヨルダン	1500
ロシア	800-1500
レバノン	900
リビア	600
トルコ	600
パキスタン	500
ウズベキスタン	500

（出所）International Centre for the Study of Radicalisation and Political Violence (ICSR or I.C.S.R.) data from the second half of 2014 より筆者作成。

こうした結果は別の統計からもわかる。表 4 でも、モロッコはジハーディストの数では、国別で 3 番目に多い国に位置している。

表4 国別ジハードイストの人数

COUNTRY	MUSLIM POPULATION	NUMBER OF JIHADIS	% OF MUSLIMS WHO HAVE GONE TO FIGHT
ALGERIA	34,780,000	200	0.000575
AUSTRALIA	399,000	250	0.06
BELGIUM	638,000	250	0.039
CANADA	940,000	30	0.0032
DENMARK	226,000	100	0.044
FINLAND	42,000	30+	0.071
FRANCE	4,704,000	700+	0.015
GERMANY	4,119,000	About 300	0.007
INDONESIA	204,847,000	30-60	0.00003
IRELAND	43,000	25-30	0.07
KOSOVO	2,104,000	100-120	0.006
KYRGYZSTAN	4,927,000	10+	0.0002
MOROCCO	32,381,000	About 1,500	0.005
NETHERLANDS	914,000	120	0.013
NORWAY	144,000	40-50	0.035
RUSSIA	16,379,000	Over 800	0.005
SAUDI ARABIA	25,493,000	About 2,500	0.01
SINGAPORE	721,000	1	0.0001
SPAIN	1,021,000	51	0.005
SWEDEN	451,000	About 30	0.007
SWITZERLAND	433,000	About 10	0.002
TUNISIA	10,349,000	About 3,000	0.03
TURKEY	74,660,000	About 400	0.0005
UNITED KINGDOM	2,869,000	500	0.017
UNITED STATES	2,595,000	100+	0.004

SOURCES: National governments, Pew Research Center, CNN reporting.

(出所) National Governments, Pew Research Center, CNN Reporting

(<http://nawaat.org/portail/2014/09/20/reporting-through-the-grapevine-western-and-tunisian-media-on-for-eign-fighters-in-syria/>, accessed on March 30, 2016).

これらの数字は、モロッコの国外諜報機関 DGED (研究情報総合機関 (Direction Générale des Études et de la Documentation) が2014年9月30日に公表した情報によっても裏付けられる。それによれば、ISに加わっているモロッコ人は1,193人であった<sup>6</sup>。

モロッコの国内情勢は一見したところ安定しているように見えるが、実際には治安当局は国内急進派の活動を非常に警戒している。表5は、2014年8月から2015年11月までIS関係に関するインターネットと新聞情報を集めたものである。モロッコの治安当局がISの国内細胞に関して徹底的な調査をしている様子が見える。おそらく国内と国外を結ぶ戦闘員のリクルート・ネットワークが存在し、それをモロッコ治安当局が監視をしているものと思われる。モロッコ政府はこうしたテロ対策を強化するために、2015年3月、治安対策を専門とする「司法調査中央部局」(Le Bureau central d'investigation judiciaire: BCIJ)を設置した<sup>7</sup>。

表5 モロッコ国内におけるIS関係情報

モロッコのIS関係情報		
2014/8/14+CA3	3000人以上のモロッコ人ジハードистがシリア、イラクから帰還。とくにモロッコ北部、Tanger, Tetouan, Nadorなど	Bladi.net
2014/8/19	モロッコ人戦闘員、シリア、イラクに3000人以上。内2000人近くが二重国籍	Quotidien d'Oran
2014/8/24	ISと関係のある者2人、逮捕	Aujourd'hui Le Maroc
2014/10/9	ISと関係あるテロリスト2人に、Saleの刑事裁判所で3年の禁固刑	Aujourd'hui Le Maroc
2014/10/16	al-HoceimaとOujdaでISを称賛するモロッコ人2人を拘束	Aujourd'hui Le Maroc
2014/10/27	Kenitraで、フランスとモロッコでテロを計画していたISとつながるテロリスト2人を逮捕	Aujourd'hui Le Maroc
2014/11/24	インターネットサイトでJund al-Khalifa au Maghreb al-Aqsa に忠誠を誓った6人を逮捕	al-Manar.Com
2015/1/21	ベルギーの大衆紙がAbdelhamid Abaoudの父親Omarにインタビュー記事掲載。このような息子を持つことを恥。息子は欠席裁判で7年の刑。	Het Laatste News
2015/3/22	モロッコのテロリストの細胞を破壊	RFI
2015/3/24	IS内に135人のモロッコ人子供、185人のモロッコ人女性(BCIJの発表)	Aujourd'hui Le Maroc
2015/4/6	Safiで、ISにつながるモロッコ人男1人、とフランス人女1人を逮捕	Aujourd'hui Le Maroc
2015/4/15	ISがモロッコで旅行者を殺害するようよびかけ。	bladi.net
2015/4/28	Laayouneで4人からなるテロリスト細胞を破壊	Aujourd'hui Le Maroc
2015/6/3	Sidi Moumenで9人のISとつながる細胞を破壊	BBC
2015/6/29	モロッコ政府とISとが交渉をした、とのアルジェリアの新聞の報道を、モロッコ政府が否定。報道を非難	Aujourd'hui Le Maroc
2015/7/2	Nador, Laayoune, Tetouane, Meknes, Sid Ifni, Beni Mellal, Saidia, Dakhla, Tangerで9人がISのプロパガンダを行ったことを理由に逮捕。BCIJの発表。	Aujourd'hui Le Maroc
2015/7/9	Casablanca, Tanger, Sale, Jorf al Melha, Kelaat des SraghnaでIS戦闘員のリクルート細胞の破壊。リクルート活動をしていた8人を逮捕。BCIJの発表。	Aujourd'hui Le Maroc
2015/7/21	Tanger, Bouznika, Khouribga, TaounateでISに忠誠を誓う8人の活動家の逮捕。細胞の破壊。BCIJの発表。	Aujourd'hui Le Maroc
2015/7/23	Melliliaで女性へのIS宣教とリクルートをしていた女性活動家がスペイン警察により逮捕。BCIJ発表。	Aujourd'hui Le Maroc
2015/8/25	モロッコとスペインでIS戦闘員のリクルート活動家14人を逮捕。	The wall street Journal, BBC News
2015/9/2	Tanger, Larache, SaleでISへの資金援助のため商売をしている者9人を逮捕。ジャム、トマト缶、ミネラル水、ナツメヤシ、トウモロコシの実、砂糖菓子など。BCIJ発表。	Aujourd'hui Le Maroc
2015/9/21	上記の拘留者に最高刑の判決	bladi.net
2015/9/26	MelliliaでISにつながるジハードист9人の逮捕、とスペイン内務省発表。	Aujourd'hui Le Maroc
2015/10/5	CasablancaでIS戦闘員のリクルートと派遣活動を行っていた6人を逮捕。BCIJ発表。	Aujourd'hui Le Maroc
2015/11/9	イスタンブール空港でモロッコ人40人がIsへの参加容疑で拘束、追放。	Aujourd'hui Le Maroc
2015/11/13	パリで同時多発テロ。死者130人。	
2015/11/18	カサブランカから到着した8人のモロッコ人がISへの加入を疑われ拘束。	bladi.net
2015/11/18	パリのテロ実行犯の一人Abdelhamid Abaoud死亡。	
2015/11/19	モロッコ治安当局がSaint-Denisのアパート情報をフランス治安当局に伝えた、との情報。	bladi.net
2015/11/20	Yassine Abaoud(Abelhamidの弟)が父親の生地Agadirで逮捕。	Reuters
2015/11/21	トルコのアンタルヤでモロッコ系ベルギー人Ahmed Dahmani。パリのテロに関与用語。	Reuters
2015/11/26	モロッコ系ベルギー人Mohamed Abrini(30歳)がAdeslamと行動を共にしていたとの嫌疑で国際指名手配。	Le FIGARO.fr

(出所) 各種のインターネットサイトおよび新聞をもとに筆者作成。

## (2) フランス・ベルギーにおけるモロッコ系ジハードイストのネットワーク

パリのテロ事件（2015年11月13日）およびベルギーのテロ事件（2016年3月22日）のテロリストの大部分がモロッコ系ムスリムたちからなるグループであったことはあまり指摘されていないが、重要な問題である。パリのテロ事件の首謀者アバウド、その従弟でテロリストをかくまい爆弾の運搬にも関与したとされるハスナ・アイト・ブラフセン、後方支援担当でカフェ・バタクランのテロ実行犯サラ・アブデサラーム（逃走していたが、ベルギーでのテロ事件の直前、2016年3月18日に逮捕）、彼の兄弟でカフェのテロで自爆したイブラーヒーム・アブデサラーム、サッカー場テロで自爆したビラル・アドフィ、テロの準備や逃走を手助けしたとされるムハンマド・アブリニ（指名手配中）などは、みなモロッコ系である。その他、カフェの実行犯のサミ・アミムール（自爆）とオマル・イスマイル（自爆）はアルジェリア系ムスリムであり、疎外された移民社会の中で同じマグリブ諸国の出身者ということでモロッコ系ムスリムと互いに親近感を抱いていたと思われる。ベルギーのテロ事件についても、首謀者ナジム・アシュラウィー、ハーリド・バクラーウィー、イブラーヒーム・バクラーウィーはみなモロッコ系である。しかも、ナジムはハンガリーでサラ・アブデサラームと行動をとるとし、ハーリド・バクラーウィーはサラ・アブデサラームがパリで潜伏していたアパートを借りていたことがわかっている。それではこのようなムスリム移民の子がなぜテロリストになったのか。

1990年代に中東や北アフリカにおけるイスラーム急進派の活動はヨーロッパのムスリム移民にも大きな影響を与えた。テロリズムが西欧社会にも脅威となると、それまで普通に暮らしていたムスリム移民の第2世代、第3世代の若者たちを見る視線も変わってきた。彼らは、意図的に外側からイスラーム意識を強制的に自覚させられたのである。そこには次のような特徴がみられる。

- ①彼らは、生まれたイスラーム諸国では生活せず、外国で生活している（トランス・ナショナル）。
- ②西欧で生まれた者は、両親や祖父母の出身国について関心がない。
- ③フランス国籍、イギリス国籍、アメリカ国籍などを持つ者もあり、また数カ国で勉強をしたり、生活経験を持ったりした者もいる。
- ④近代的学問を学び（しばしば好成績を収める）、西欧での青春時代はディスコに行ったり、女性とつきあったり、酒を飲んだりもした。
- ⑤社会的には、中間階層の出身の者も、“非常に貧しい地区”の出身の者もいるが、しばしばつらい生活体験やドラッグや入獄などの経験をもっている。

- ⑥彼らはみな、西欧で、急進的なモスクでの個人的な出会いの結果、ムスリムとして再生した。
- ⑦彼らの政治的急進化は彼らの宗教への回帰と同時に起こる。要するに、彼らの急進化は宗教的に深い理解に達したからではない。
- ⑧家族、出身国、居住国、いずれともアイデンティティー関係は希薄であり、アイデンティティー・クライシスの中で生きている。
- ⑨全ての家族あるいはほとんどの家族が、戦闘員になった息子たちの行方を正確に把握していない。自爆テロによる死を知って驚いたり、当惑したりする（これと対照的なのがパレスティナの自爆テロで、ほとんどすべてのテロリストが、自爆テロの実行日当日まで家族とともに生活をし、死後も彼らの近親者は息子（娘）の死を誇りにしている）。

戦闘員たちはモスクや街区のローカルなイスラーム空間の中から出現するが、彼らは家族とも、出身国とも、居住国ともアイデンティティーを切断し、想像によって作られたウンマ（イスラーム共同体）に属し、そこで行動する。彼らはマイクロ世界（居住街区、モスク）、マクロ世界（想像のウンマ）、ヴァーチャル世界（インターネット、現代コミュニケーション）の三つの世界を絶えず行ったり来たりしている。特定の国家や社会の状況は彼らの関心事ではない。自分たちのローカルな「イスラーム化された空間（モスクであったり、街区であったりする）」の創設にのみ関心をいさぐ。しかしこのローカルな共同体はヴァーチャル世界によってグローバルな世界と結びついている。こうして彼らの世界は国家の枠組みから離れ、脱領域化することになる<sup>8</sup>。

### 結論に代えて——モロッコ系イスラーム急進派の活動をどのように考えるべきか

（1）戦闘員が多いことと西欧におけるモロッコ系テロリストの存在に関して

- ① 戦闘員の多くがモロッコ北部リーフ地方の出身なのは、開発の遅れとヨーロッパと接する地にあるため（セウタ Ceuta とメリーリャ Mellila はスペイン領）、西欧に対するジハード思想の影響を受けやすい。ベルギーのテロ首謀者ナジム・アシュラウィーはアル・ホセイマの近くアジュディール (Ajdir) の出身である。また、リーフ地方はハシーシュ（大麻）の産地でハシーシュの密売によって得た利益が戦闘員の資金源になっている、という指摘もある<sup>9</sup>。
- ② モロッコ（とくにリーフ地方）とベルギー・フランスのモロッコ系コミュニティの間には、人的及び資金的ネットワークが存在している可能性が高い。

- ③ アラブ・イスラームの周辺に置かれているという意識が中東の中心に関わりたいと意識をより強くさせる。
- ④ 多額の報酬が得られる。2000-3000 ドル/月（シリア人は 500 ドル）、配偶者手当が、200 ドル/月、子供一人につき 50 ドル/月が支払われたとの証言もある<sup>10</sup>。

**（２）2011 年アラブ政変後、他のアラブ諸国が混乱し、テロが頻発しているのに対し、モロッコ国内が比較的平穏であることに関して**

- ① このことについては、2000 年に入ってから経済発展が国民の不満を一定程度解消している、と判断することも可能であろう。
- ② 2011 年の憲法改正と国王主導の「民主化」が国民に理解されていること、選挙後に PJD の体制内化により王政と調和した穏健イスラームが広く浸透したことなどが国内における急進的の活動を抑制している、とみる向きもある。
- ③ 2015 年 1 月に改正されたテロ対策法の効果。同年 3 月、治安対策を専門とする BCIJ が設置され、国内におけるテロリストの厳重な監視と細胞破壊が効果をあげている、との見方がある。
- ④ IS の活動が活発なリビアのような国と接していないため、武器も運動員も入りにくい。たしかにリビアと接したチュニジアと比較するとそれは一定の説明にはなっているだろう。

—注—

<sup>1</sup> 選挙結果については以下を参照。白谷望「モロッコにおける権威主義体制持続のための新たな戦略——2011 年国民議会選挙と名目的な政権交代——」『日本中東学会年報（AJAMES）』日本中東学会、第 30-(1)号、2014 年、37-69 頁。

<sup>2</sup> 私市正年『北アフリカ・イスラーム主義運動の歴史』白水社、2004 年、150 頁。

<sup>3</sup> Zeghal, Malika, *Les islamistes marocaines: Le défi à monarchie*, Paris, Éditions la Découverte, 2005, pp.251-264.

<sup>4</sup> Ibid., p.257.

<sup>5</sup> Ibid., p.258.

<sup>6</sup> Jeune afrique, 24/nov./2014.

<sup>7</sup> この部局は、国土監視中央局(la Direction générale de la surveillance du territoire : DGST)の中に置かれた。Aujourd'hui le Maroc, 23 mars 2015.

<sup>8</sup> 私市正年『原理主義の終焉か—ポスト・イスラーム主義論』山川出版社、2012 年、61-76 頁。

<sup>9</sup> Jeune afrique, 24/nov./2014, レポーター Mohamed Ahmed Odda の証言。

<sup>10</sup> Ibid.